

れど、目に立つやうなものぢやありません。」

「ぢや切るかね。」浦野は妻に訊ねた。

「然うですね。切つてもらひませうか。」

「それならば、ちよつと歸つて、機械を取つて來ます。」

Y―氏は、さう言つて引返して行つた。

妻を番してゐる不安な時間が、いくらか経過した。

「切つていゝのか知ら。」浦野は大分たつてから、言出した。

「さうですね。」妻も、自分の顔に、さう度々メスを當てられることが、

氣にかゝり出して來た。

「もし切つて悪くなつたら、取返しがつかないことになるかも知れない。

一應T―さんに診てもらつてからにした方が安全らしいね。」

「さうですね。でも、もう來るでせう。」

「醫師に悪く思はれることを恐れては不可ない。子供がそれで死んだのだ。」

「後になつて、何と言つて見たところだね。」

「然うだ。然うしやう。」

そして浦野は急いで、使にもたせてやるためにT氏への手紙を書いた。T―氏の家は可也遠かつた。暫くすると、Y―氏は機械の包みをさげて、威勢よく入つて來た。

「どうも恐縮でした。」

「いゝえ何に……。」

「處で、切つて如いか悪いかは素人には解りませんが、何しろ顔のことですから、一應専門家に相談してからにしたいと思ひますが。」

「さうですか。」Y―氏は何氣なさうに應へたが、目の色がいくらか曇

つた。

「それで、今其の人を呼びにやりましたから、お差支がなかつたら、暫く待つてゐて頂きたいと思ひます。」

「さう。」Yー氏は少し考へてから、「私もちよつと二三軒廻つて來るところがありますから、それでは又上ることにして頂きませう。」

「どうも済みませんね。」妻が言つた、

「いゝえ。」

Yー氏は時計を見ながら出て行つた。

不安な時間が、また二十分、三十分、四十分と過ぎた。日がもう暮れてゐた。電燈の光の下に彼女は絶えず頭を冷しながら、今歸つて行つたYー氏の假聲などを使ひながら笑談に晷を過した。

「遅いね。」

浦野は待遠しさうに言つた。

「それは然うと、鵜はどうしたらう。毛をひしつたかね。」彼は臺所の方へ聲をかけた。

「今ちばあさんが裏で取つてゐます。」誰かゞ應へた。

「幾羽あつたい。」

「十五羽ですつて。」妻が應へた。

浦野はそれを物足りなく感じたが、出て見る氣もしなかつた。

俵をつけて行つた使の歸つて來たのは、大分遅かつた。使はT氏からの横封を持つて來た。浦野は急いで、それを披いた。手紙には今夜參られない理由——浦野の想像した——明朝出がけに出診すると云ふこと、今夜中の手當とが詳しく叮嚀に書かれて、別に熱さましの藥を幾服か添えてあつた。

その晩はそれでT氏の指圖どほり、硼酸水の濕布で過された。

翌朝T氏の來たのは、七時頃であつた。T氏は膏藥を剝してみると、
「何でもありません。決して悪い性質のものぢやありません。」と言つて、
微笑した。

腫は濕布のために、餘程薄らいでゐた。

「切る必要はありませんとも。反つて切つたゝめに、腫れたり、發熱したりしたくらのものです。」

Y氏はかう言つて、また膏藥で腫物に蓋をした。

「ほんとに可かつた。」

T氏が歸つてから妻は言つた。

「Yに脅かされたんだ。大業に言つておいて、少しでも物にしやうと

云ふのだ。」

「やつぱり駄目なんですね。」

家のなかゝ急に陽氣になつて來た。

暫くすると、浦野は臺所で忘れられてゐた鰯の料理に取りかゝつてゐたが、應て獨で肉に餛飩粉をまぶしたり、汁を拵へたりして、お國風の羹を作るに忙しかつた。

芹をゆがす時分には、妻は寢床から出て來て、寢衣のまゝで、何かの用を達してゐた。晝飯の膳には美しい小鳥の羹が、浦野によつて準備された。

「へえ、これがお國のぢぶと云ふの、私にも一杯食べさして頂かう。」
彼女はさう言つて、それを少しばかり椀に盛つて食べはじめた。
「ほんとに美しい。」彼女が言つた。

近刊

新脚本叢書第六編

- | | |
|-------|-----------|
| 山崎紫紅著 | 祇王祇女 |
| 小村雪岱畫 | 繪集隅田川 |
| 吉井勇歌入 | 鏡花隨筆 |
| 泉鏡花著 | 鏡花隨筆 |
| 上司小劍著 | 長篇處女から母に |
| 吉田常夏著 | 小説情青春往來 |
| 岡本綺堂著 | 小説探偵半七捕物帳 |
| 長田幹彦著 | 長篇小説夕潮 |
| 小野小峽著 | 平和お伽文庫第壹編 |
| 吉井勇著 | あらんどお伽話集 |

本叢書は第一卷より第十卷まで毎月壹冊發行

岡本綺堂著

新刊 四國の秋

小村雪岱裝幀

定價九十錢 送料八錢

内容

兩國の秋 子供役者の死 刺物師の物語 雨月物語 心中浪華春雨 鳥邊山心敷 番町皿屋敷

徳川末の華やかな時代を背景にして、蛇使の女太夫と旗本の次男との戀を描き出したのが兩國の秋である。此作が本書中の雄作であり、且氏として代表作的な作品であらうと思ふ。鳥邊山心中は明治初春狂言に演ぜられた大鳴采を博せるもの、雨月物語と云ひ、子供役者としての死と云ひ皆傑出した作である、是等を纏めて一冊とせざる本書の價值を認めて頂きたい。

鮎崎英朋著

泉鏡花小唄入 柳川春葉序

泉鏡花著 小村雪岱裝

三葉用 圖書集 一の次女

再版

三の歌 三行

定價壹圓五十錢 送料八錢

定價九拾五錢 送料八錢

發兌

東京神田區錦町三番六 電話本局三三六六

和平出版社

振替口座 七八七八

吉井 勇著 定價貳拾錢・送料二錢

脚本第一編

調・讀・尼

市村座に上場して喝采を博せる脚本である。殺伐な鎌倉時代を背景とし、戀に破れ愛児を失へる尼僧を中心とした悲劇。

岡本 綺堂著 定價貳拾錢・送料二錢

脚本第二編

京の友禊

櫻吹く春は物狂はしきやうな頃である。されど傷みを抱く者には悲しみは更に深い。落花の哀しさを思はせるやうな悲劇である。

岡本 綺堂著 定價貳拾錢・送料二錢

脚本第三編

長邊(と)二

明治座に上演されて満都の劇界を驚倒せしめし脚本、讀通すと一種云ひ得ぬ哀想にそゝられる。

岡本 綺堂著 定價貳拾錢・送料貳錢

脚本第四編

武家義経

帝國劇場五月上演遊女定家へ仇同士が馴染を重ね二人は仇と知りて雙方に義理立て仇の相討と共に定家も二人の義理立てで瘡る悲劇。

岡本 綺堂著 定價二十錢・送料二錢

脚本第五編

佐々木高綱

明治座六月上場鎌倉殿の政治となりて高綱の功名恩賞もなく弓矢を捨て、高野の寺坊となる迄の物語る悲劇。

山崎 紫紅著 定價貳拾錢・送料二錢

脚本第六編

祇王禊女

帝國劇場七月興業上場好評を博せるもの彼の平清盛の寵者なりし祇王が佛御前の爲めに己の寵を奪れ戀敵となる悲しき女心を描きたる悲劇。

エペリー卿原著・橋本弘譯 定價八拾錢・送料八錢

最新刊

安全生活

有名なるエペリー卿の原著、卿が深奥なる哲理的の頭腦より、一般に極めて安全なる生活法を説いた名著である。

スチーブンス・女史原著 定價八拾錢・送料八錢

最新刊

女代の衛生

女一代の衛生を最も丁寧に、通俗に婦人病より伴ふ普通の病氣まで平易に説けるもの婦人は是非本書を備へ置かねばならない。

吉井 勇著 定價八拾五錢・送料八錢

最新刊

麻の葉集

平生の處女小説集にして最近最も好評を博せるもの、句樂思以下情味豊かなる筆にて描ける傑作集。

泉 鏡 花著 定價一圓・送料八錢

最新刊

彌生帖

現今文壇に異彩を放てる鏡花氏の小説集、その作品に關しては喋々するまでもない、出版界の一大收獲として本書も切に勤める。

久保田萬太郎著 定價七十五錢・送料八錢

最新刊

駒形小唄

考へれば考へればあじけなき生活である、と氏の告白であるが然もその生活を描き出した本書は情味の溢るるばかりである。

小山 内薫著 定價六十錢・送料六錢

最新刊

就我前

戯曲界を以つて鳴る氏の小品集、收むる所四十篇様々な人生の例證を説いてゐる。衰頹亦内容にふさはしい。

正宗白鳥著

定價九拾錢
送料八錢

最新刊

梅鉢草

現今文壇に動かし能はざる地位を有する白鳥氏の小説集である。本書の出版が讀書界に一波瀾を引起すべきを信じて疑はぬ。

藤澤衛彦著

定價壹圓
送料八錢

好評

藝者の美學

現代の婦人三十を拉し來つて、表裏より研究せる珍書、美寫眞挿入。

藤澤衛彦著

定價八十錢
送料八錢

四版

はやり唄と水唄

藝にやさしい民謡の粹を集めたもの、文藝風俗の好資料ともならう。

田山花袋著

定價一圓・送料八錢

最新刊

柳暗花明

自然派の元老たる花袋氏特意の題材たる花柳の巷を描き出せる小説集、讀書界の一大收穫として本書を切に薦む。

沼波瓊音著

定價五十錢
送料四錢

五版

俳句と其作り方

俳句入門書、その作り方を容易に説明してある。

谷紀三郎著

定價七十錢
送料六錢

再版

女への手紙

男より女へ送つた手紙百通、情緒纏綿として盡きざるもの。

笹川臨風著・廣川松五郎裝畫

長篇舞

殿

菊半截版四百五十頁
表紙木版手摺數度
箱入美本定價九拾錢送料八錢

歴史小説家として令名ある先生の得意とせる源氏物語の内最も華かに且つ哀愁深き一生を終りたる靜御前か鎌倉に於ける凄麗な舞姿を流麗なる筆致にて物語たるもの尙ほ江戸末期に於て春信の一枚繪に唄はれた柳屋お藤の性格を麗麗に畫ける先生最近の傑作集也。

徳田秋聲著・廣川松五郎裝幀

小説犧

牲

菊半截版四百餘頁
表紙木版手摺數度
箱入定價九十錢送料八錢

(目次) 陰影、犠牲者、悲しみの後、夜行列車、授業の始まる頃、鶴の羹等、皆な文壇に於て高評を博せるもの、親となり子となりその自然の眞情は湧いてこの一編となる、一般家庭の好讀物として薦む。

右田寅彦著・新脚本叢書第七編

つんぼ座頭

各編定價二十錢 送料二錢
每册表紙木版半摺美本

帝國劇場七月(中幕)興行上場太郎冠者かつんぼと座頭のお面白き掛合夏的好讀物たり。

新刊

岡本綺堂著

橘さゆめ装

菊半截版六百頁表紙
木版手摺装幀美麗箱入

最新刊

綺堂脚本十種

定價 送料 一元八角

◀ 本書内容目次 ▶

白虎隊 佐々木高綱 平家蟹 切支丹屋敷 雨夜の曲 入鹿の父 蒙古襲來 阿蘭陀船 新朝顔日記 千葉笑ひ

愛劇家へ面白い脚本をお薦めす

戯曲作家として第一人者 快心の戯

曲十種を集め 満都の劇場に於て好

る氏獨特の史劇、艶物はまた讀物として無限の興

味を誘ふ。劇の進歩に伴ふ脚本の愛讀者の盛んな

る傾向ある昨今、先づ本書の内容に接せられ脚本

發兌

東京神田錦町三の六
振替東京八七八七番

平和出版社

275
1102

終

